

ないことから見えるもの

アフリカの貧困国で暮らしてみて、ふと気が付いたことがある。

フレンズ 帰国生 母の会
古田 暁子

モザンビークの衝撃的な初日

我々家族が3年弱過ごしたモザンビークはアフリカ南東部、インド洋に面した国で公用語はポルトガル語。首都マプトは南アフリカに近い最南部にあり、我々のような外国人は主に南アフリカからの輸入品で生活していた。世界最貧国の1つのこの国では、首都に住んでいても垣間見える地元の人の生活ぶりはとても厳しそうだった。

モザンビークに到着した日の夜、先行して生活を始めていた夫に連れられて近くのピザ屋に行った。わが家はマプトの中でも治安が良い大使館街にあったが、目の前の大通りはあちこち傷んでおり、信号で停まると子どもが窓ガラスをノックして物乞いをしてきた。中心地にあるお店にはちゃんとした駐車場はなく、適当に中央分離帯や道路に沿って路駐するのだが、どこからともなく青年が出てきて「車を見張っている」とジェスチャーで示す。夕飯を終えて出てくるとその青年が今度は道路に出ようとする我々の車を誘導してくれ、そこで夫は10mt(メティカル、1メティカルは3円程度)を渡した。子どもたち(当時13歳と11歳)にとっては衝撃的な初日となったが、何より地元の子どもたちを無下にあしらっているように見える夫がとても冷酷に映りショックだったようだ。



常に不足していた生活物資

マプトは温暖で、沖縄に近い気候で過ごしやすかった。夏は40度近くで暑くなるが、樹木が多いので日陰は比較的涼しく、冬も上着を1枚羽織れば過ごせる程度だった。それゆえ、植物はよく育ち、街中のマンゴーやアボカドの木は季節になるとたわわに実をつけていた。国民のほとんどが今も自給自足の生活をしていると聞いたが、気候的にそれが可能な気がした。とはいえ、それ以外の生活物資は常に不足していた。それは我々外国人にとっても同じで、スーパーに買い物に行っても生鮮品の棚が空っぽということもしょっちゅうだった。生活物資だけではなく、子どものおもちゃや洋服、日用品まで多くの人が週末に国境を渡って南アフリカに買い出し旅行に出かけた。東京にいれば欲しいものを求めて巡る店は無数にあるし、時間がなけれ